仙台市自殺対策連絡協議会　会長

小髙　晃　委員提出資料

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　宮城県精神科病院協会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　エバーグリーン病院

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　みやぎ心のケアセンター

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　小高　晃

　今回の会議は他の業務と重なり欠席いたします。以下のように書面にて意見を申し述べます。お取り計らいの程よろしくお願い致します。

　　　　　　　　　　　　　　若年者の自死対策について

Ⅰ・若年者の自死対策を考えるにあたっては、若年者（中学生・高校生）の抱える多様な問題に対して統合的に対応する視点と体制が必要と思われます。既に宮城県（若年者検討部会）では平成21年度から、検討組織を立ち上げ検討を進め、試行事業を展開していることと思いますので、この成果・知見を十分に生かしていただきたいと思います。

Ⅱ・仙台市では中学生の「いじめ」「自死」の問題について精力的に取り組まれていることと思います。中学生の抱える問題の夫々―いじめ・自死・不登校など―は密接に関連する事象であり根底には中学生をとりまく環境の基盤があるものと想定されます。角田市の調査では、中学生の半数近くが死を考えることがあるとの結果が出ています。問題ごとの個別対応ではなく、予防の観点での統合的な理解と対策を希望します。

Ⅲ・Ⅰ・Ⅱで触れた統合的理解と対策のモデルとして、オーストラリアの実践が挙げられます。オーストラリアでは、学校内の暴力や差別の問題に苦慮するなかで、2000年から、「マインドマターズ」の事業を立ち上げ今日に至っています。この事業では、中学入学の段階から、学校や仲間となじむ行事や相互理解と相互支援のためのグループワークを展開し、メンタルヘルスに関わる授業を継続します。また、地域社会を巻き込みながら、心豊かな学びの環境作りを目指した風土作りを推進します。さらに、いじめ・不登校・暴力・自死の予防活動やメンタルヘルス不調者への対応を行い成果を挙げています。いじめや自死等の問題については、組織的予防体制作りから事後対応までを含めた詳細なマニュアルが作られています。「喪失と悲嘆」を主題とした授業では、中学入学時点の喪失体験などを踏まえ、喪失や悲嘆、困難は、皆が遭遇する普遍的な事態であることを確認し、互いにどう支えるか、自分自身はどう対処するか、先人の経験を学び、グループワークも行います。教師自身が自身のつらい体験にどう向き合うかについての助言もガイドブックには記載されています。

是非、外国の知見についても十分調査研究のうえ活用していただきたいと思います。